

福岡空港から中部国際空港を経由してバンクーバーまで、すでに16時間近くかかった。空港では輸行ケースを開けられ、隅々までチェックされた。バンクーバーからペンティクトンまでは小型機。予約していたものの全てのバイクは積み込まれず、不安なまなざしで残されたバイク達を見送る。翌日、バイクは無事に届けられた。カナダへの入国は実にシンプル。事前にインターネットで申告しているの、入国手続きはATMのような機械で、日本語の質問に答えるだけ。プリントアウトされた紙を持って検査を受ける。担当官から挨拶をもらい、とても気分良かった。レンタカーを借りて、車で約40分のところにある宿泊地、Apexリゾートスキー場へ向かう。標高1700メートルのところにあるコテージには何でも揃っており、洗濯機、レンジ、オーブン、冷蔵庫、シャワー室、タオル、各種洗剤まで用意してあった。毎日洗濯し、着替えをたくさん用意していたが、ほとんど使わずにすんだ。初日は日用品と食料、飲み物の買い出しと散策で時間が過ぎた。すでに他の競技が行われており、会場周辺はお祭りの雰囲気漂っていた。もともと湖に面したリゾート地で、泳いだり砂浜に寝転んだりする人が多かった。二日目の午後から受付会場へ向かった。受付では引き換えのチケットなど何も必要なく、パスポートのみ確認された。簡単な書類にサインと住所を記入して提出するだけで、ゼッケンナンバーや参加賞、タイミングベルトをもらうことができた。大会要綱などの印刷物の配布は全くなく、コースや規則、参加者名簿などは全て自分でインターネットからダウンロードしなければならなかったが、大きな経費節減効果があると思った。受付時間は3~4時と区切られていたが、その時間前に受付することができた。各ギアバックにナンバーはなく、用意されたシールを貼って、シューズやヘルメットなどを入れて、準備した。

大会前日、早起きして近くの山の山頂約2200mを目指した。登りは良かったが、下りで足を使い、大会の直前に疲弊してしまった。日本チームの説明会に参加して、バイクや各ギアの預託に向かった。ヘルメットのシールは三箇所、バイクのゼッケンもシールだった。バイクチェックは見るだけ、ヘルメットのシールとあごひもも目視のみでパスできた。ユニフォームチェックもあるということであったが、当日に行われるとのことであった。時間や予定はコロコロと変わるので、常にホームページを確認しなければならなかった。トランジションエリアでは、ゼッケン番号を見て、右奥、二列目など誘導されるので、ハンガーはすぐに見つけられた。ギアは指定された別のところに、番号順に二つ並べておいた。レース中は番号を見て、自分でピックアップしなければならず、わかりやすいように目印として持ってきたアームウォーマーを各ギアバックの紐に結んだ。空気入れはトランジッ

トの会場に持ち込むことは許されておらず、会場内に準備された空気入れを、順番に並んで借りなければならなかった。リスが悪戯するので、食料品は付けておかない方が良いとのことであった。実際、ジェルは各エイドでもらい放題であったので、全く準備する必要がなかった。夕食を早めに済ませ、8:30にはベットに入ったが、どういう訳か全く眠れず、結局朝まで一睡も出来なかった。軽く頭痛がしたが、仕方がないのでロキソニンを飲んでレースに臨んだ。

朝 2:30 から準備を始め、持ってきた温めるだけのご飯 250g とふりかけ、インスタントのみそ汁、バナナなどを食べた。3:30 過ぎに出発、4 時過ぎに会場に到着した。駐車場が離れており、10 分ほど歩いた。気温は 20 度弱くらいで、トラウエアーの上に羽織るものが必要だった。バイクに補給食をセットし、ウエットスーツを着込んで入水チェックに向かった。気温は低かったが水温はそれほどでもなく、泳ぐのにちょうど良い水温だった。2 日前の高波とは打って変わって静まっており、波はほとんど無かった。コースは砂浜から湖の中心へ向けてスタート。ホテルを挟んだ反対側へ戻り、バイクへトランジット。一路南へ下り、街中を抜けて北側の湖を 2 周回、同じエリアに戻りランへ。ランは街中を 3 周回するコースであった。(スイム 3km、バイク 120km、ラン 30km)

エリートの部からウェブスタート。スタート位置に向かった。ウェブ毎に帽子の色でエリア分けされており、同じ色のキャップの集団に紛れ込んだ。49 歳以下は一緒にスタートした。タイミングベルトを忘れた選手もいたが、会場で簡単に再交付された。翌日返却しなければ \$ 75 とのことであった。

皆夜明け前の薄暗い湖に飛び込んでいく。外国の選手は体が大きく、バトルに巻き込まれると危険であると判断し、後方からスタート。遠浅のため、何度もドルフィンキックを打って沖を目指した。無理せず大きな選手の後ろについて行く作戦。手頃な選手をぴったりとマークした。右に大きなブイを見ながら進み、やがて黄色い三角のブイに変わったら、右にゆっくりとカーブを描くように泳いで行く。途中、谷間から日が昇り、湖面を照らし始めたが、やがてブイと朝日が完全に重なり、全く見えなくなった。かまわず前の選手の足に食らいついて行く。やがて違う色のキャップの選手から追い抜かれ始め、手頃なところで後ろについた。スイムの終盤で日本人女子トップに抜かれたので、すぐに後ろに着いたが、どんどん引き離されていった。ほとんどキックを使わない、軽い泳ぎ方だった。

スイムアップ、時計を見ると 55 分台であった。目標 58 分であったので、上出来である。ジッパーを下ろしながら走っていると、ボランティアの集団に止められ、無理やり？ ウエットを脱がせてくれた。これは時間短縮には素晴らしいサービスだった。ギアをピックアップしてテントへ向かう。ゆっくり準備しているとどんどん追い抜かれた。私はトイレに

向かったが、他の選手はほとんど使っていなかった。バイクのハンガーの位置でタイム差が出ないように、全員大きく回ってバイクへ向かわなければならなかった。他の選手のトランジットは2分台、私は6分近くかかっていた。

バイクスタート。濡れていることもあり、風が冷たかった。一路南へ向かう。走り始め、どんどん抜くことができ、飛ばし過ぎではないかと不安になった。右側通行のため、時々「レフト！」と大きな声をかけかけられ、左から抜かれる。体の大きな選手がどんどん抜いていった。前半はフラット、汗もほとんどかいていないが、スポドリの水をもらう。味はイマイチであった。水は柔らかいペットボトルで、掛水として一度使ったのみで、ほとんどもらわなかった。バイクは湖沿いの平坦なコースと街中の鋭角なコーナー、長い登りと下りからなる湖の周回コースである。周回コースに入り、上り下りが出てくるとロードバイクの出番であった。はるか前方のTTバイクがどんどん近づいてくる。急な登りは一箇所だけで、他は比較的なだらかな登りだった。登りは路面が非常に荒れており、窪みや割れ目、小石が多くてタイヤがパンクしないか心配だった。途中、牧場やブドウ畑、湖面を見下ろす高台があり、素晴らしい景色を堪能できた。下りになるとTTバイクの外国人選手にあつという間に抜かれて行いった。途中ずっとマーシャルのバイクに並走されていた。集団で走っていたカナダ選手がブルーカード（ペナルティ5分）をもらって、長い登りの先にあるテントに入ってしまった。違反時は選手と目を合わせて、大きな声で番号を読み上げていたので選手も認識できていたと思う。カナダ、アメリカの二人の女性選手を含めた10人前後と抜きつ抜かれつを繰り返して周回を重ねた。二日目になると登りがグッと足にきた。さっきは沢山抜き去った長い登りで抜き返すことができない。ジェルを補給するが、足は軽くならなかった。最後、街中のメインストリートを通り過ぎるといよいよランである。バイクを降りて押して行くとバイクを受け取ってもらえた。バイクパートは3時間29分、思ったよりもいいタイムで終わった。

ランギアをピックアップし、再び同じテントの中へ。靴を履き替え飛び出した。他の選手のトランジットは2分、私は3分以上かかっていた。ランに入るとメインストリートを緩やかに登っていく。「日本頑張れ！」の声援を数多くもらった。やや下ってから折り返し、途中で先行する日本人をチェックする。5~7分先に20人近くいるようだ。大柄の外国人選手に抜かれる。エリート選手にも抜かれたが、ものすごい汗と息遣いであった。気温は思ったよりもなく、水を半口ずつ取って行く。街中を一度左折し、コンベンションセンター近くで折り返し、再び湖方面へ、ゴールを右手に見ながら再び左折。スイムコースとなった湖沿いの美しい砂浜沿いの道を走って行く。日本チームの宿泊先のホテルの前で、選手団団長の中島さんらの声援と助言を貰う。緩やかに左折した後再び折り返し、ゴール

地点前を通過。2周回目に入った。

1周目、10kmの通過タイムは約45分、途中トイレに入ったことを考えれば上出来であった。エイドでは水、コーラ、F2C（スポーツドリンク）、バナナ、クッキーなどが配られていた。エネルギーの消耗はそれほどでもなく、ドリンクと水を取りながら進む。2周回目に入ると、順位は全く分からなくなり、とりあえずペースをキープして目の前の選手を抜く事に専念する。二周目のラップは再び約45分、何とか維持できた。3周目に入り、気温が上昇。足が重くなってきたがそのままのペースを維持、残り1.5kmにスパートをかけることにする。痙攣は無いが、太ももが痛く蹴りが弱い。無理やり手を振って体を前に運んで行く。いよいよ最後の直線、残り1500mでダッシュをかける。ゴール直前で一人かわしてフィニッシュ。ランは2時間17分で終わった。

トータル6時間52分、目標が約8時間であったので私としては上出来である。先にゴールした日本人選手と健闘を称えあった。アームウォーマーやカーフガードなど、最初の規則では使用できないようになっていたが、イスラムの女性選手もいて、ユニフォームの下であれば、ほぼ何でも使用していいように変更されていた。ルールは常に変更されるので、細かなチェックが必要であった。今回のユニフォームには殿部にパッドが全く無いため、ユニフォームの下にバイクパンツを履く選手もいた。ドラフティングのチェックが厳しいと噂されていたので、抜かれたらその度に給水して、追いかけていないことをアピールした。強い選手ばかり集まっているだけあって、トランジットの速さが際立っていた。また、スイムの技術が高く、他の選手とぶつかり合うことがほとんど無いため、全くプレッシャーを感じずに泳ぐことができた。ジェルは十分に用意されており、持参する必要が無かった。レース終了後、近くのレストランで低血糖症状と思われる状態に陥った選手がいたが、どこに相談してよいかわからず、日本人選手団の宿泊先に頼ることとなった。このような場合も想定して、緊急の相談や軽度の手当てが受けられる連絡先など把握しておくべきであった。また、日本人選手団に同行するメディカルスタッフや相談できる選手等の情報が欲しかった。一つだけ残念だったのは、表彰式で他の国の国歌が流れている間、他の国の選手は直立不動の姿勢を保っていたのに対し、日本人だけが話を止めず、他国の国歌に対して敬意を表していなかったことである。国歌斉唱の際はきちんと「気をつけ」をして、他の国に敬意を表すべきであるが、我々日本人はそのような教育が徹底されておらず、次回は事前ミーティングなどで注意を促すべきであると感じた。また、輪行中のバイクを飛行機に乗せる際は、開封され空港で隅々までチェックされる。検査機に通すことができる小さいサイズの輪行ケースを使用している場合は、検査機に通すことができる旨、手荷物の手数料がかからない旨などを英語などで記した書類などを準備して、検査時間を短縮すべきであったと思った。

全体を通じて、素晴らしいコース、素晴らしい運営、素晴らしいサポート、素晴らしい応援を頂き、心からレースを楽しむことができた。毎年は無理だが 3~4 年に 1 度、参加できるようにこれからも努力して行きたいと思う。サポート頂いた JTU の皆様、応援して下さい。同僚や家族、支え合った仲間にも心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

